

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

福山大学人間文化学部紀要  
第2巻(2002) 25頁～43頁

# 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

吉田一衛

低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能を、be動詞、後置修飾語、S+V+Oの3構文について分析した。その結果、いずれも学習効果は認められなかつたが、その傾向はみられた。学習困難度は、修飾語句や接続詞が付加されることに左右される。また、単語の意味は理解しているが、語句の出現順に理解しようとし、構文の機能を把握していないことが明らかになった。

[キーワード：意味、構造、学習効果、3構文、学習困難度、修飾語句]

### I. リーディングにおける低学力者的研究

リーディングの研究は、かなりなされているが（垣田 1979）（垣田・松村 1984）、低学力学習者（低学力者）のリーディングについての研究はあまりなされていない。高梨・卯城（2000: 105-119）は、読解不振者（poor readers）の研究を紹介している。おもに海外のリーディングに関連した論文により、低学力者の情報を提供しているが、日本の低学力者のリーディングの研究なり教授に直接役立つようには思われない。

たとえば、Gardnerが、社会教育モデルにより、それぞれのコミュニティーが、第2言語を学ぶことの重要性と意義を、どのように考え、どのようにスキルの発達を期待しているかを示した（p. 106）と述べている。しかし、大学におけるリーディングの低学力は、こうした社会的視点からでは早急には解決できそうにない。さらに、Lee & Schalertの研究から、第2言語の能力が第1言語の読みの力の2倍以上を説明できるとしているが（p. 109）、低学力者の場合、英語そのものの学力がないのでこの説明は役に立ちそうにない。また、「背景知識やコンテクストからの情報からくる影響は単語の認識力が発達すると弱くなる」（p.110）としているが、低学力者は単語の意味がわかつても、構造がわからぬことを、吉田（2001）は明らかにした。この引用には「単語の認識力が発達すると」という前提がきている、英文の構造そのものが理解されないと、単語の意味がわかついても、英文の意味がわからないというのが低学力者の特徴である。

ところで、不振者または低学力者とは、どのレベルの学習者が特定する必要がある。寺島（1986: 12）は、「なぜ定期制にきたのか」について、英語はおろか日本語で原稿用紙1枚に表現できない高校生の実態をあげている。そうした例を考えると、低学力者と一口にいってもかなりの幅が考えられる。ここでは TOEFL, TOEIC, CELT, JACET 等の標準テストが、

## 吉田一衛

低学力のため適用できなく、高校または中学校レベルの基本的な構文や文法を習得していない学生ということにする。現在、日本で急速に問題になり、その数が圧倒的に増えているのは、こうした学生である。その意味で、小谷野（2001: 245）の「彼らは（中学校の教師）、「インプット理論」という言語習得理論について、自然に文法を内在化させるという方針を立てているのだが、これはかなり集中的に、かつ多くの時間を使ってやらなければ効果がないのみならず、文法も知らず辞書の引き方も知らない生徒を大量生産する危険があるし、現実に起こっている大学生の学力低下はここから来ているのではないかとさえ思われる。」と述べているのは、低学力者を研究しようとする者にとって十分注目すべき指摘である。

### II. Good Language Learner の研究

海外でsuccessful language learner(SLL)の論文が目に留るが、学習効果を上げる方策としてSLLを中心に研究したものである。その対比としてunsuccessful language learner(ULL)がとりあげられている。しかし、ULLを中心とした学習不振の原因を深く分析し効果的な教授法を独立して研究したものはあまり見当たらない。しかし、SLLの研究成果は、低学力者の研究にそれなりの示唆を与えてくれると思われるので、一瞥しておく必要がある。

Rubin (1975: 41-51) は、ULLが与えられたものを受け身的に練習するのに対して、SLLは学習したことをもとに練習する機会を創造している。また、SLLはstrategyとして、(1) 推理を歓迎し正確に行い、その推理は文法構造、語彙項目の糸口をつけ、メッセージの余剰性に関連させる、(2) たえず言語構造に注意を払い、分析、分類、統合をする、(3) メッセージを理解するため、文法に注意を払うだけでなく、文脈にも注意をむけることを示している。ところで、ULLは推理を働かせず、分析、統合もできず、文脈に注意を向けてないとすれば、どのようなstrategyがあるだろうか、それが問題なのである。

これに対して、Stern (1975: 304-318) によれば、学習初期には文型の習得から文型の拡張と応用に進み、さらに意味の協調へと向かい、文型を自動的に使う自然なコミュニケーションに進み、最終的には創造的な言語使用能力を習得する。さらに、code-communication dilemmaという用語で、学習者がformとcommunicationに同時に注意を向けることは難しいとしている。教室では、sound system, vocabulary, grammarといったcodeに注意する。要するに、形式に関心をもつ。ところが、communicationでは形式に注意することなく、形式を操作する。このときはじめて言語は機能的（functional）になる。SLLはこれら二つのことに専心する必要性を知り、形式中心の練習をしながら言語の使用に注意を向けるが、ULLは両方を避ける。また、ULLは学習について洞察をしようとせず、学習困難点を言語学習のtaskの性質に求めようとしないので、明確な学習習慣を習得できない。さらに、教師に依存し、言語学習に対して抵抗さえ示すという。

Ingram (1968: 156) は、SLLがはじめのレベルから上のレベルへ進んで行くのに対して、

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

ULLは、はじめのレベルに留まっていると指摘している。Naiman *et. al* (1978)は interview, observation, case study によりSLLの特徴を明らかにしている。それによると、Immersion Programが ULL には学習効果がなく、SLLはそれぞれの学習段階でL1とL2を効果的に比較する。また、学習では適当な刺激に焦点を当て、不適当な刺激は捨てる。ところが、ULLは不適当な刺激に惑わされ、注意すべき刺激を選ぶことができないことを明らかにしている。比較的低学力者のリーディングに焦点を当て、薬袋 (2000: 20) は、SLLが単語一つ一つを覚えるのではなく、句や節に注目し、文の意味に注意を向けるとMangubhiの考え方を引用しているが、ULLは一つ一つの単語を覚えて、句や節を理解することから始めなければならない。

これらの研究はいずれもSLLを中心とし、その特徴を明らかにしているが、ULLに焦点を合わせ、どのようにしてULLの学力を伸ばすかについてはほとんど分析されていない。

### III. 低学力学習者のリーディングにおける文法の役割

前回の研究（吉田 2001）で、低学力者は、語彙の意味を通して英文を理解しようとするが、文法構造を把握していないことがわかった。そのため、文法構造がリーディングでどのような役割を果たすか確認しておく必要がある。高島（1995: iii）は正確に話し手の意志を伝え、相手の意志を的確に理解しようとするとき、文法が必要であるといっている。Bialystok & Frohlich (1978: 333)はリーディングが文法に依存しているとしながらも、文法は意味の説明には必要だが、その形式的構造の明示的知識はリーディングには本質的なものでないとしている。さらに、Nunan(1996: 101-2)は、英語の練習は形式的で、叙述的（declarative）習得を図るべきだが、文脈の中で文法構造を習得するようにしなければ、手続的（procedural）技能を伸ばすことが難しくなる。その理由は、form, meaningとuseの間に存在する体系的関係を無視することになるからである。したがって、言語の学習過程は一つずつ学習し積み上げていくものではないと述べている。英語の習得を全体的に考えるとその通りだが、このことは低学力者の英語習得には必ずしも当てはまらない。一度に一項目の文法構造を習得しなければ、いくつもの要因が混乱して学習効果が上がらないからである。したがって、積み上げこそが重要と考えられる。ある習得段階に達したときにNunanの考えは当てはまることがある。こうしたことから、本研究では、比較的易しいリーディングのテキストを使用し、文脈の中で文構造を理解させるようにした。

文法構造を理解することにより、リーディングの学力を伸ばそうとするわけだが、文法用語の指導についても考えておく必要がある。Borgo (1999: 98) は、文法の説明が学習者の成長度合、知識に合うようになされれば、学習が促進するといっている。また、meta-languageが時間を浪費する堂々巡りをなくし、コミュニケーションを効果的にすることができるともいっている。ただ、Aの学習者にとって、文法用語の使用が学習効果を上げるから

## 吉田一衛

といって、他のすべての学習者に、このことがすべて当てはまるとは限らないとするのは当然である。したがって、文法用語の使用は、学習者の特性を考え、適度に使用すべきであると思われ、本実験では、必要と思われる範囲内で文法用語を使用する方法をとった。

### IV. 研究の目的

前回の研究（吉田 2001）では、社会的、教育的背景による英語学力の低下の原因として、大学受験生の激減、学生の忍耐力の喪失、学級崩壊等について考察した。このような背景をもとに低学力者が増大しているにもかかわらず、英語教授理論にもとづいた研究がほとんどなされていないことを論じた。

たとえば、英語教授理論の一つである対照分析と誤答分析では言語の構造を中心に分析しているが、低学力者の誤答分析には不適当であることを示し、別の視点から低学力者のリーディングの認知的特徴を明らかにした。その特徴の中で本研究に継続するものを次に示す。

#### 1 英文中の語の出現順序により意味を理解しようとする。これには3つの特徴がみられた。

##### (1) be動詞を無視する。

One was a huge grey ox with short horn and gentle eyes. の下線部をOne→huge→ox 「一頭の巨大な牛」と意味をとらえ、be動詞を無視して直線的に思考する。

##### (2) 後置修飾の無理解

A big attic opened out on both sides of the stairs. の下線部を「両側の階段」と訳しof the stairsの後置修飾が理解されていない。

##### (3) 副詞句の無理解

Grass waved in the wind just like all the grass along the creak bank. の下線部で、「風のように」と単語の出現順序にしたがって意味をとらえ、likeがall the grassと結合し動詞waveを修飾することが理解できていない。

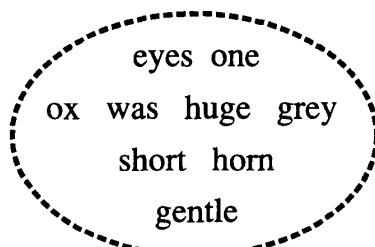
#### 2 S+V+Oの構文が理解困難である。

On top, that cook stove had four round holes and four lids fitted them. の下線部を「4つの丸い穴と4つの丸いふた」と訳している。接続詞andがあると後ろにくる名詞句four round lidsを前の名詞句four round holesに結合する。そのためandの次にくる文four round lids fitted themというS+V+Oの構文が理解できない。

これらの結果から、低学力者は英文の意味を単語の出現順序によって捉えようとするところである。さらに、単語の意味を自由に結合させようとする。たとえば、(1)に示した文について考えてみると、次の図式に示すように、機能語を除いた内用語が、ゆるい点線の枠

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

の中に自由に存在する。枠内の内容語は自由に結合する認知的機能をもっている。このことが「一頭の巨大な牛」と、wasを無視し意味をとらえることになっている。このことは、意味が形式（構造）の前に存在していることを表している。佐藤(1996)のいう、本来言語は語彙の選択によって、現実を意味論的に切り分ける操作が随意的になされるとする言語の本質と一致する。



昨年のこのような研究結果は、152名の学生を対象にし、その中から27名の低学力者を選び分析したものである。したがって、被験者をさらに多くし、この結果を検証する必要があった。さらには、ここに示した構文が、学習により定着するかどうかを前回の実験とは異なる方法で明らかにすることが求められた。これらが本研究の目的である。

### V. 方法

本研究は次の方法によって実施した。

1. 実験期間 2001年4月—7月

2. 使用テキスト Laura Ingalls Wilder, *Little House on the Prairie*, Shinozaki Shorin, 1988.

このテキスト使用の理由は、文構造が比較的易しいものを含んでいたからである。しかし、英語の低学力者には、それらの文構造は必ずしも易しいものではなかった。それでも、これを使用したのは、英文の文章を読むことにより、内容の面白さと文脈の中で、単語の意味を理解することをねらったからである。

3. 被験者 福山大学 生物工学科 32名 電子・電気工学科 22名 計54名

被験者は、Yoshimura & Shigesako(1998)の3年前の調査結果が示す特徴とほとんど変わっていないものと思われる。その調査結果によると次のようにになっている。

英語が嫌い 48.6%、 英語が弱いと思う 80.7%、 英語は将来必要と思う 64.9%，

英語が好き 23.9%、 リーディングを勉強したい 52.2%、 文法を勉強したい 25.0%，

辞書の使い方を習っていない 中学校 50.0%， 高校 66.1%

半数の学生が英語が嫌いで、80%の学生は英語が弱いと考えている。しかし、65%の学生

## 吉田一衛

は、英語が必要と思っている。このことは、多くの学生が英語は必要と思っているのだが、必ずしも英語学力がそれに伴わないことを物語っている。すでに、鶴田、高梨、村田（1987）と吉田（1988, 1999: 233-264）は、必要性と学力とは必ずしも一致しないことを実験により明らかにしている。

辞書の使い方を習っていない学生が、中学で半数、高校で66%いる。小谷野（2001）は辞書の引けない大学生の多いことをとりあげ、英語教授法の問題点を指摘しているが、大学で初めて辞書を引くという学生が多い。中学・高校では、辞書指導を重視していないようである。リーディングの学習では、単語力が弱い学生には、辞書を引くことにより、その意味や活用を知ることは重要な学習活動の一つと思われる。寺島(1986: 119)は低学力の高校生の当面の目標を辞書さえあれば、英文がとにかく読めそうだという自信に目標を置いている。本研究では、辞書を持参することを義務づけているが、学期が始まって3ヶ月してやっと70%が持ってくる状態である。このような状態は、現在の大学の多くの学生に当てはまるものと思われる。

### 4. 方法

リーディングの学習では2で示したテキストを使用し実施した。目的で示した3つの文法項目を中心に説明を加えながら、英文を日本文に直すようにした。リーディングの学習では、英文として多くの種類の構文が現われるので、必ずしも、3つの文構造だけに指導を限定するわけにはいかなかった。

たとえば、3つの構文の一つであるbe動詞構文では、..., there it (=tunnel) was a narrow, strait, hard path down between the grass stems. (p.14) の文に注意を向けさせる。その際、be動詞が主語のitとa narrow以下の述部を結合する機能を説明する。これは、be動詞を無視して、単語の出現順にitとnarrowを結合する傾向がみられるからである。

次ぎに、後置修飾構造が理解困難であることが明らかになった。したがって、For away to the east, a broken line of different greens lay on the prairie. (pp.12-13) の下線部of different greensの構文に注意を向けさせた。日本語と逆の語順が理解できないからである。()内の数字は使用テキストの頁を表している。

第3に、修飾語句がS+V+Oの構文につくことから、この文構造が理解困難であることが明らかになった。そのため、..., then with his spade he dug a shallow little hollow along two sides of that space. の下線部の構造を説明し意味を把握するようにした。

寺島(1986: 136)は前置詞と連結詞が文を長くするため、高校生が一挙に読めなくなることを指摘しているが、S+V+O構文については、修飾語句や接続詞が加わることで、意味を理解しにくくなることが考えられた。そのため、どの程度の修飾が加わると理解困難になるかを知るため、もっとも易しい構文を中学2・3年の教科書*New Horizon English Course 2・3*

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

(東京書籍：1992) から選んだ。さらに、少し程度の高い構文を高校の教科書*Evergreen English Course I・II* (第1学習社：1993) から選んだ。それがAppendix 2に示したテスト問題である。

前年の実験では、Appendix 1のテスト文を含む英文を訳させ、その場で、誤った日本文を記録し、定期のテストで再度これらの英文を提示し、その定着度を測定した。その結果、学習効果があった構文となかった構文があった。今回の実験では、3種類の構文にしほり分析した。そのテスト構文がAppendix 1に示したものである。これら構文は、テキストの後半に出てくるもので、今回のpre-testとpost-testの段階では、すべて未習のものである。pre-testとpost-testの間の期間は1ヶ月であった。

## VII. 仮設

これまでに示した前年の研究結果より次の仮設を設定し、Vで示した方法により分析した。  
be動詞構文、後置修飾構造、S+V+O構文を学習することにより低学力学習者のこれら構文の学力を伸ばすことができる。

## VIII. 結果

本実験の分析結果を以下に示す。

### 1. 3構文の学習効果

3構文の学習効果を示したのが表1である。ANOVAによるとpre-とpost-testの平均の差は

表1. ANOVAによるpost-testとpre-testの平均の比較

平均差	自由度	t値	p値	95%下側	95%上側
1.056	53	1.945	.0671	-.033	2.144

No significant df=40 t value=2.021

1.056であったがt値1.945で有意差はなかった。したがって、学習効果はみられなかった。しかし、その傾向はみられた。

被検者54名を構成する電子・電気専攻22名と生物工学専攻32名の学生を対象とした結果が表2と3である。

表2. 電子・電気のANOVAによるpostとpre testの平均の比較

平均差	自由度	t値	p値	95%下側	95%上側
1.727	21	1.855	.0776	-.209	3.663

No significant df=21 t value=2.080

## 吉田一衛

表2から、電子・電気専攻の学生については、ANOVAによる平均の差1.727、t値1.855で有意差はなかった。したがって、学習効果はみられなかった。しかし、その傾向はみられた。

次に、生物工学専攻の学生についてみてみると、表3から平均の差.594で、t値.906で有意

表3. 生物工学のANOVAによるpostとpre testの平均の比較

平均差	自由度	t値	p値	95%下側	95%上側
.594	31	.906	.3717	-.742	1.930

No significant df=30 t value=2.042

差はみられなかった。したがって、学習効果はなかった。

## 2. 構文の学習難易度

17構文の学習難易度について示したのが表4でAppendix 1に掲げた構文である。表の中で、問題の1~17は構文の番号である。表中の数値は各構文の正答数と%を表している。生物とあるのは生物工学を示している。Post-Preは電子・電気+生物のpost-testとpre-testの差を示すものである。各問は2点を与えた。したがって34点満点となる。まず、この表の難易度の高い構文からみてみよう。

### (1) 学習難易度の高い構文

No 16の文は正答率が3.70%で、もっとも学習効果のなかった構文である。まず、各構文の正答率を（ ）内に示し、次にその文を掲げ、「 」に下線部の誤訳と誤りの特徴を示すことにする。

No.16 (3.70%) Sometime in the night she dreamed of wolves' howling, ..

「時々夜に」とsometimeをsometimesと誤解している。そのため、後置修飾句in the nightも理解されていない。

No 11(9.26%) We have six months before we must build on the homestead.

「私たちは6カ月前自作農場を建設しなければならない」six monthsをbeforeと結合して意味を捉えている。beforeがそれ以降の文の接続詞であることが理解されていない。

No. 5 (16.67%) the cold of the wind poured through her.

「その冷たい風は」と捉えof the windがthe coldを修飾していることを理解していない。

また、cold が名詞であることも理解していない。これはNo.16のsometime in the nightでsometimeをsometimesと理解したのと同じ現象である。すなわち、既知語の意味を異なる

低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

**表4. 各構文の学習難易度**

問題	電子・電気	生物	電子・電気+生物 pre-test	電子・電気+生物 post-test	電子+生物 post %	Post-Pre
1	8	14	21	22	40.74	1
2	15	23	33	38	70.37	5
3	10	18	20	28	51.85	8
4	9	11	19	20	37.03	1
5	3	6	4	9	16.67	5
6	3	10	19	13	24.07	-6
7	8	16	21	24	44.44	3
8	12	26	31	38	70.37	7
9	5	11	20	16	29.63	-4
10	4	10	18	14	25.93	-4
11	3	2	13	5	9.26	-8
12	8	24	14	32	59.26	18
13	5	10	20	15	27.78	-5
14	4	10	11	14	25.93	3
15	2	15	13	17	31.48	4
16	1	1	1	2	3.70	-1
17	4	12	13	16	29.63	3
Total	104	219	291	323	100.00	32
$\bar{X}$	4.727	6.848	5.389	5.981		
N	22	32	54	54		

語の意味にあてはめようとしている。

No. 6 (24.07%) a big attic opened out on both sides of the stairs. 「両側の階段」と訳し、both sides+stairsと結合し、出現した語の順に前から意味を捉え、of the stairsがboth sides の後置修飾であることを理解していない。

No. 10 (25.93%) waved in the wind just like all the grass along the creak bank.  
 「ちょうど風のように揺れた」とwind+likeのように結合し、like以下の句がwavedを修飾していることがわかつていない。

No. 14 (25.93%) He put Ma's stove in the lean-to outsides the back door.

「外の後ろのドアに」とthe back doorがoutsidesの目的語であることを無視している。

outsides+back doorと結合し語の出現順に意味を捉えている。outsides the back doorがthe lean-toの後置修飾であることを理解していない。

No. 13 (27.78%) He dug a hole and loosened the soft soil until it was fine and crumbly.

「やわらかい土をみつけるとほろほろくずれやすかったので、土などをほぐして穴をほった」とuntil以下の句がloosenedを修飾している副詞節であることが理解されていない。目的語が長くなり、それに動詞を修飾する副詞節がくると目的語構文を正しく理解できなくなる。

No. 9 (29.63%) Nobody looks for a blizzard at the time of year.

「今年」のようにthis time+yearと結合して前から意味を捉えている。したがって、of yearがthis timeを修飾していることが理解できなく、語の出現順に意味を捉えようとしている。

No. 17 (29.63%) stared at the vague white curtain and listened to the stillness.

「ほんやりと白いカーテンをみつめていた」vagueをstairedの修飾語として意味を捉えている。「みつめる」とくると「ほんやりと」が結合しやすいのだろう。

No. 15 (31.48%) Even when the night was still, ...

「今までになく静かな夜」とeven+nightのように、語の出現順にしたがって意味を捉えている。しかも、still+nightとしてbe動詞のwasを無視している。

No. 4 (37.04%) Everything must be carefully fitted into the space.

「みんなの空間にぴったりはめこまれていた」のようにeverything+spaceと結合させている。あるいは「注意深くその空間にぴったりはめこまなければならない」のようにeverythingを省略している。

No. 1 (40.74%) One was a huge grey ox with short horns and gentle eyes.

「ある大きな灰色の牛には短い角があり、そしてつぶらな目がついていた」のようにone+huge grey oxとしてbe動詞を無視している。oneがwas以下の主語であることが理解されていない。したがって、No.3のbe動詞を無視して意味を捉えようとするのと共通した特徴を示している。

No. 3 (51.85%) It is a little house only half built,...

「その小さな家は半分しかたてられていない」It+little houseと結合しbe動詞を無視している。

## (2) 学習難易度の低い構文

70%以上の正答率の構文を難易度の低いものとしたが、次の二つの構文がみられた。

NO. 2 (70.37%) It was a big house, a real house with two stories, and glass windows.

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

「それは2階建てでガラスの窓の本当の大きな家だった」とItをwasの主語として理解している。

No. 8 (70.37%) Its board walls were still yellow inside.

「その板の壁」を「その壁板」とwall+boardと意味をとらえている学生がかなりいた。自分なりに語順をつくりあげている。しかし、正答率は高かった。

### (3) 学習効果のあった構文

No. 12 (得点差 'post-pre test' 8) that cook stove had four round holes and four round lids fitted them. (( ) 内はpost-testとpre-testの得点差を示す)

pre-testでは「なべは4つの丸い穴と4つの丸いふたが、そのとき合っていた」のように four round holesとfour round lidsをandで結合し意味を捉えている。そのため four round lids が fitted them の主語であることを理解していなかった。しかし、1ヶ月後のpost-testでは目的語を正しく理解している。この目的構文が理解されやすかったのは、接続詞 andの前と後の文が並列的に結合されているためと思われる。

No. 3 (得点差 8) It is a little house only half built, ...

「その小さな家は唯一半分建てられている」とItをlittle houseに結合してbe動詞を無視していたが、post-testでは、Itをisの主語として正しく理解している。

No. 8 (得点差 7) Its board walls were still yellow inside.

「壁の板」を「板壁」と正しく意味を捉えている。正解が57.41%から70.37%に増加した。

No. 2 (得点差 5) It was a big house, a real house with two stories, and glass windows.

「その大きな家」としていたのが「それは大きな家だった」とItをwasの主語として正しく理解するようになっている。

No. 5 (得点差 5) the cold of the wind poured through her.

「冷たい風」としていたのが、「風の冷たさ」と後置修飾句of the windを正しく理解するようになった。

### (4) 学習効果のなかった構文

pre-testよりpost-testの方が得点が低い構文である。

No. 11 (得点差 -8) We have six months before we must build on the homestead.

「6ヶ月前自作農場で働かなければならなかった」とsix months+beforeのように意味を捉える傾向が残っている。beforeがwe以下の文の接続詞であることが理解されていない。

No. 6 (得点差 -6) a big attic opened out on both sides of the stairs.

「屋根裏部屋の両階段に」とof the stairsがboth sidesの後置修飾句であることが理解されていない。

## 吉田一衛

No. 13 (得点差 -5) He dug a hole and loosened the soft soil until it was fine and crumbly.

pre-testでは「やわらかい土地がくずれやすくなるまで」と正答していたのが、post-testではuntilがit以降の文をつなぐ接続詞であることがわからなくなっている。

### 3. 目的語の学習難易度

この分析では、電子・電気工学科23名、生物工学科35名、人間文化学部24名、合計82名を被験者とした。目的構文の難易度を探るため、中学・高校の英語教科書から目的構文を10選んでテストした。その結果を示したのが表5である。1間に2点を与えた。

表 5 目的語の難易度

問題	電子・電気	生物	電子・電気+生物	人間	電子・電気+生物+人間	%
1	21	34	55	19	74	90.24
2	9	27	36	10	46	56.10
3	16	29	45	16	61	74.39
4	17	29	46	20	66	80.47
5	11	25	36	15	51	62.20
6	16	27	43	17	60	73.17
7	8	17	25	12	37	43.13
8	16	20	36	15	51	62.20
9	10	23	33	7	40	48.78
10	18	32	40	16	56	68.30
Total	317	537	854	313	1167	100.00
X	13.783	15.345	14.724	13.042	14.232	
N	23	35	58	24	82	

この表をもとに正答率の低いものから高いものへと並べ、以下に下線部の誤訳とその原因について示すことにした。

No. 7 (45.13%) Whenever she saw a problem, she began working to find a good answer to it.

「仕事をみつけるのをはじめるのは、とてもよい答えた」としてworkingをfindの目的語にしている。

No. 9 (48.78%) the city of Hiroshima built a stadium to welcome its first professional baseball team.

「広島が建てたスタジアムでプロの野球チームをかんげいした」のようにbuiltの目的語がstadiumであることを理解していない。また、「広島のスタジアムにプロ野球チームをしようとした」とHiroshimaとstadiumを結合させて意味の理解をしようとしたもの

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

が多い。

No. 2 (56.10%) Today, we grow a lot of beautiful flowers on the rich land.

「リーチランドにたくさんのきれいな花がさいている」では目的語のa lot of beautiful flowersが理解されていない。「ゆう福な土地のたくさんの美しい花をそだてる」では on the rich landをa lot of beautiful floweersの修飾句にしている。

No. 5 & 8 (62.20%) Sadako had a piece of paper in her hands.

「彼女は手で千羽づるをおった」の訳ではa piece of paperがhadの目的語であることが理解されていない。

For a long trip, the automobile usually takes more time than train.

「普通自転車は電車より長い時間のっていた」として、timeがtakeの目的語であることがわかつていない。

No. 1 (91.47%) I watched a baseball game on TV.

No. 4 (80.49%) people cleaned their streets and rivers.

No. 1とNo. 4はほとんど正しく答えていた。

## VIII. 考察

低学力者のリーディングにおける3種類の構文 (be動詞、後置修飾、S+V+O)について学習し、その効果を測定したが有意差はみられなかった。したがって、学習効果はなく仮説は証明されなかった。しかし、学習効果の傾向はみられた(平均差 1.056)。これを2つのクラスに分けてみると、電子・電気のクラスと生物工学のクラスとも平均差に有意差がみられず、学習効果はみられなかった。しかし、電子・電気のクラスには、その傾向がみられた(平均差 1.727)。学習効果が上がらなかった原因是、前回の実験では、理解困難な構文を講義中に説明し、それを定期テストに出した。その結果、半数の学生が正解し他の半数は正しく答えられなかった。このことは低学力者は、学習した構文そのものをもう一度そのままテストしないと、構文の習得が難しいことを物語っている。すなわち、一つの特定構文を、それに似た構文を通して学習しても習得が困難なのである。同一構文の意味と構造が転移しにくいことから、応用力が弱いことを示している。

次に3種類の構文17のそれぞれについて考察する。まず、正答率30%以下の学習困難度の高い構文は9構文であった(Nos. 16, 11, 5, 10, 14, 13, 9, 17, 15)。たとえば、sometime in the nightで、「時々夜に」とsometimeをsometimesの意味と混同し、後置修飾句のin the nightを無視して訳している。このことはthe cold of the windについてもいえる。「その冷たい風は」と意味を捉えていて後置修飾句of the windの機能を無視している。これはcoldが名詞としての意味があることに気がつかず、cold=「冷たい」ということが脳裏にあり、これが瞬間に出てきてcold+nightと理解したものと思われる。正しく意味と構造を理解させるには、

## 吉田一衛

coldが「寒さ」という名詞であることを、Don't stay outside in the coldのような例文を何度も提示しながら指導する必要がある。

正答率40~50%の比較的学習困難度の高いbe動詞構文(Nos.1, 3) one was a huge grey oxで「ある大きな灰色の牛」やit is a little house only half built「その小さな家は」のようにbe動詞を無視して意味を捉えようとする。これらの現象は意味が構造に先行して機能していることを示している。このことは前回の実験結果を証明することにもなっている。

次に、比較的学習しやすい構文はbe動詞構文であった(Nos. 2, 8)。これらはいずれもIt was a big house, a real house with two stories.やIts board walls were still yellow inside.のように修飾語句がなく、単純な構文であった。したがって、修飾語句がなければ、意味と構造が理解されやすいことが明らかになった。

第3に、preとpost testから学習効果のあった構文についてみてみよう(得点差5~8、Nos. 12, 3, 8, 2, 5)。たとえば、be動詞構文のIt was a big house, a real house with two stories.やS+V+Oのthat cook had four round holes and four round lids fitted them.、後置修飾句のof the windのあるthe cold of the wind poured through her.であった。目的構文では接続詞andで2つの文が接続されているか、後置修飾句ではcoldが名詞であることが確認されれば意味が正しく理解された。

第4は、pre-testよりpost-testの得点が低くマイナスになった学習困難な構文である(No. 11, 6, 13)。たとえば、S+V+Oの構文 We have six months before we must build on the homestead.で接続詞beforeやuntilが文を接続すると文全体が複雑になり理解しにくくなる。また、a attic opened out on both sides of the stairs.でon both sides of the stairsのof the stairsのような後置修飾句が、名詞句につき副詞句として動詞を修飾する場合、理解が困難になる。

第5に、S+V+Oの構文の学習困難度である。中学・高校の英語教科書から10の構文を選んでテストした。学習困難であったのはshe began working to find a good answer to it (No. 7)のような構文で、to find a good answer to itの不定詞の副詞的用法がくるとS+V+Oの構文が理解困難になる(No. 7, 9, 2, 5)。さらに、more~thanのような比較の句が目的語に付加されると理解困難である(No. 8)。これに対して、I watched a baseball game on TV.のようなS+V+Oの構文が比較的単純なときには学習が容易である(Nos. 1, 4)。したがって、S+V+Oの構文の理解では、目的語に動詞を修飾する副詞句が付加されると学習が困難になることが明らかになった。さらに、目的語に並列する接続詞がきて、長い句や節になると理解が困難になる。ことにリーディングでは、会話文と異なり、副詞句等が付加されるので、文構造が複雑になる。したがって、話すを中心としたコミュニケーションの指導とは異なる。リーディングの文は会話文よりも複雑で長くなるからである。このことは、中学初級の英語でスピーキングとリーディングの構文が一致しているが、3年生になるとスピーキングとリーディングの構文が異なってくることにもみられる。そのため、コミュニケーションの文法指導とリーディングの文法指導は異ならずをえない。

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

第1～5までの考察から、低学力者は単語の意味は理解しているが、構文を理解していないことがわかる。すなわち、be動詞を無視したり、後置修飾、目的の3構文を理解していないのである。意味は理解しているのだが、構文が理解されていないので、英文を正しく把握できない。このことはCohen (1981: 230) が、基本を習得するまでは、初級の学習者にとってContextがかえって障害になるといっていることと一致する。Contextに注意を払わずに個々の語だけに注意を払うため、Contextや構文全体に注意が向かないのである。したがって、意味を文構造にしたがって正しく理解する習慣を身につける必要がある。Cohenは初級の学習者は語彙表で単語を覚えるのが得意で、中級の学習者がContextの中で語の意味を理解するのが得意である、したがって、両者は意味理解で対照をなしているといっている。

この特徴の一つが、本実験で明らかになった。すなわち、前から出現する単語の順序に従って意味を理解しようとしている。これが、構文がわからないときに低学力者がリーディングでとる方略である。リーディングでは、形式から意味へと発展していくのが望ましいとされているが、低学力者の場合、これが逆になり、単語の意味はわかるが、構文すなわち形式が分かっていない。いわば、意味の機能が構文の機能の先にきていることである。このことは、意味の機能から形式の機能へと学習を発展させる必要性を示している。

## IX. 英語教授への示唆

中学校・高等学校ではリーディング指導はかなり重視されている。音声言語としての聞く、話すを中心としたコミュニケーション能力の重要性が強調される昨今の英語教育ではあるが、リーディングは、内容あるものを読んで理解する上で重要な役割を果たす。坂口 (1979) は中学校の低学力の生徒が、教科書を読めないことから、音読の重要性を説き、読めることで英語の興味を湧かせようとしている。リーディングの教授法も、題材に応じて音読中心、構造中心、精読を目的とし文法を中心とした読解、速読のような方法が提案されている。大内 (1981) は、内容把握の容易な題材であれば、内容把握を先にして、その後で文法的説明をする方法を掲げている。この場合の文法項目として、後置修飾構造、現在分詞の形容詞用法、過去分詞の形容詞用法を指導している。

たとえば、このように、中学校の段階ですでに後置修飾構造は指導されているのだが、大学に入学してきても、この構造が習得されていないのである。大学で理解されていない原因はいくつか考えられるが、中学のレベルに比べて、連結詞や前置詞などで修飾が複雑になっているため、意味内容が理解困難になると思われる。このことは、目的語構文についてもいえる。このような原因を考慮して、低学力者に英語の構文を習得させる努力を英語教師はすべきである。そのための資料を本研究は提供するものである。

## X. 今後の課題

今後の課題として、3種類の文構造について学習効果が現われなかつたことの解決策を考えなければならない。このことは同一構文であっても、低学力学習者の場合、単語等が異なる文であると文構造が定着しにくいことを示している。すなわち、意味と構造の転移力が弱いのである。したがって、基本の構造文からはじめ、拡張した構造文に徐々に移っていくステップが望まれる。さらに、3種類の構造文を指導したのが1カ月で、回数にして4回程度であった。この回数を増やすことにより学習効果を上げることができないか明らかにする必要がある。個々の構文については、学習困難度の高いものについての指導により、学習効果を上げることができないか分析する必要がある。ことに、動詞を修飾する副詞句がくる場合と接続詞により文が複雑になる場合の定着について明らかにすることが求められている。なお、本研究の分析にあたっては、本学の正法地孝雄教授に貴重な助言をいただいたことに感謝する。その助言を生かすため、さらに適切な数量的解析が必要と思われる。

## References

- Bialystok, Ellen and Maria Frohlich (1978), "Variables of Classroom Achievement in Second Language Learning," *Modern Language Learning*, 62, 327-336.
- Borgo, Simon (1999), "The Use of Grammatical Terminology in the Second Language Classroom: A Qualitative Study of Teachers' Practices and Cognition," *Applied Linguistics*, 20, 1, 95-126.
- Cohen, Andrews D. (1981), "Easifying Second Language Learning," *Studies in Second Language Acquisition*, 3, 2, 221-236.
- Gu, Peter Yongqi (1996) "Robin Hood in SLA: What Has the Learning Strategy Researcher Taught Us?" *Asian Journal of English Language Teaching*, 6, 1-29.
- Ingram, Elisabeth (1968), "Testing in the Context of a Language Learning Experiment," *Language Learning, Special Issue*, 3, 147-161.
- Naiman, M., M. Frohlich, H. H. Stern and A. Todesco (1978), *The Good Language Learner*, Toronto: Modern Language Center, Ontario Institute for Studies in Education.
- Nunan, David (1998), "Teaching Grammar in Context," *ELT Journal*, 31, 304-18.
- Rubin, Joan (1975), "What the "Good Language Learner" Can Teach Us," *TESOL Quarterly*, 9, 1, 41-51.
- Stern, H. H. (1975), "What Can We Learn from the Good Language Learner?" *Canadian Modern Language Review*, 31, 304-18.
- Yoshimura Masahito & Shigesako Takashi (1998), "Attitudes and English Learning Background of College Students: the First Step toward the Improvement of English Language Teaching in College," *Journal of the Faculty of Liberal Arts of Fukuyama University*, 22, 45-61.

垣田直巳編 (1979) 『英語教育学研究ハンドブック』 大修館書店。

垣田直巳監修・松村幹男編 (1984) 『英語のリーディング』 大修館書店。

小谷野敦 (2001) 「辞書の引けない大学生」 『論座』 3月号、244-255。

大内一徳 (1981) 「読むことに重点をおいたone lessonの指導過程」 『東書中学英語』 No. 145, 11-12.

## 低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

- 佐藤信夫（1996）『レトリックの意味論』講談社.
- 高梨康雄・卯城佑司編（2000）『英語リーディング事典』研究社出版.
- 高島英幸編（1995）『コミュニケーションにつながる文法指導』大修館書店.
- 寺島隆吉（1986）『英語にとって学力とは何か』三友社出版.
- 鶴田八郎、高梨芳郎、村田一郎（1987）「英語学習における動機づけと学力の関係についての調査研究—中村学園大学の学生を対象に—」『中村学園大学紀要』第19号, 21-35.
- 薬袋善郎（2000）『英語リーディング教本』研究社出版.
- 吉田一衛（1988）「英語学習における動機づけとListening Comprehensionの関係について」『福岡教育大学紀要』第37号、第4分冊、215-227.
- （1999）『英語リスニングの実験的研究—技能相互の関係および学習効果、モティベーションを中心にして—』東京書籍
- （2001）「低学力学習者のリーディングにおける認知的特徴について」『福山大学人間文化学部紀要』第1巻、23-41.

### Appendix 1. 3構文のテスト

次の英文の下線部を日本文になおしなさい。

1. There was a manger of willow poles, and two oxen were tied there. One was a huge grey ox with short horns and gentle eyes.  
mangerかいばおけ huge大きな、ox牛
2. The surveyors' house stood up in front of her suddenly. It was a big house, a real house with two stories, and glass windows.  
story 階 surveyer 測量技師 real本当の
3. It is a little house only half built, and that half unfinished.
4. The little claim shanty was as full as it would hold. Everything must be carefully fitted into the space.  
space 空間 fit ぴったりはめこむ claim shanty申請農地の掘っ立て小屋
5. Her showel flapped in the wind behind her and the cold of the wind poured through her. pour 流れる
6. She went up a few steps, and a big attic opened out on both sides of the stairs.  
attic 屋根裏部屋 stair 階段
7. Pa put Ellen and the horses in a small stable at the back of the lot. stable 馬小屋 lot 土地
8. Laura looked at the large front room. Its board walls were still yellow inside. board 板 wall 壁
9. Nobody looks for a blizzard at this time of year.  
blizzard 大吹雪(ブリザード)
10. Grass grew on the roof and waved in the wind just like all the grass along the creak bank.  
creak bank 小川の土手 wave 揺れる grass 草
11. We have six months before we must build on the homestead.  
homestead 自作農場

吉田一衛

12. On top, that cook stove had four round holes and four round lids fitted them.  
round まるい lid ふた
13. He dug a hole and loosened the soft soil until it was fine and crumbly.  
soil 土 dug 挖る crumbly ぼろぼろくずれやすい loosen 土などをほぐす
14. He put Ma's stove in the lean-to outsides the back door, where the coal was.  
lean-to (屋根) の差し掛け小屋
15. Even when the night was still, she felt crowded by so many other people so near. crowd 群がる
16. Sometime in the night she dreamed of wolves' howling, but she was in bed and the howling was only the wind. wolves wolfの複数形 (おおかみ) howl 遠ぼえする
17. She lay in bed with Mary in the dark and airy room, and stared at the vague white curtain and listened to the stillness.  
stare みつめる vague ぼんやりとした stillness 静けさ

Appendix 2. S+V+Oのテスト

次の下線部を日本文になおしなさい。

1. I watched a baseball game on TV. Then I listened to a new CD.
2. We built thousands of walls to keep the water out. Today we grow a lot of beautiful flowers on the rich land.
3. In India, every student must learn at least three languages. language 言語
4. In Japan people cleaned their streets and rivers. They also collected used cans and paper bags for recycling.
5. Sadako had a piece of paper in her hands. But her fingers were too weak to fold it.
6. When Mother Teresa started her work, many people gave up.
7. Whenever she saw a problem, she began working to find a good answer to it. problem 問題
8. For a long trip, the automobile usually takes more time than train.
9. Seven years after the end of the war, the city of Hiroshima built a stadium to welcome its first professional baseball team.
10. Paul needed some more coins so he opened the door of the booth, signaled to a waitress, and asked her to give him some change. booth 電話ボックス

低学力学習者のリーディングにおける意味と構造の機能

## Functions of Meaning and Structure in Unsuccessful Language Learners' Reading

Kazue YOSHIDA

Functions of meaning and structure in reading were analyzed focusing on three structures ; the 'be verb', 'modified word by the post-position' and 'S + V + O'. As a result, no learning effect was found but a trend was recognized. The degree of learning effect depends upon the degree of adding modified words and conjunctions to those three structures. Moreover, even if unsuccessful language learners understand some word meanings, they try to understand the sentence in a linear fashion, and thus cannot understand the function of the structure.

[Key words : meaning, structure, learning effect, learning difficulty, modified word and phrase]